巻頭言

現在、全国各地で政府主導の「地方創生」が行われていますが、都市から地方に行く若者が増えています。2015 年に実施された調査でも、20 代の若者の約 40%が「地方に住んでいい、住みたい」と言っている、という結果が出ています。立教大学の学生たちはほとんどが首都圏近郊の子どもたちです。よく彼らから「私にはふるさとがない」という声を聞きます。つまり、都市部で生まれ育った子どもたちが、自分の生まれ育った場所を「ふるさと」だと感じられないようになっているのです。ところが、地方に行くと、その地方の人たちがすごく歓迎してくれる。そこで一緒に歩いたり、食事や作業をしたり、時間を共に過ごす。そういう体験をすることを通して「そこが私のふるさとなんです」という学生が確実に増えています。そうした現状を理解すべきだと思うのです。

このたび、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「ESD による地域創生の評価と ESD 地域創生拠点の形成に関する研究」（平成 27～31 年度　研究代表者・阿部治）の一環として、東京芸術劇場と立教大学による連携講座「池袋学」2016 年度夏季特別講座との共同主催で豊島区雑司が谷をとりあげました。

当日は、ESD（Education for Sustainable Development：持続可能な開発のための教育）による地域づくりをキーワードに設定し、とくに大人と子どもの関わりによる学びや人づくりについて議論を行いましたが､すでに雑司が谷にはソフトインフラが備わっていました。過去につくられ、継承されてきた文化、歴史、自然、そしてそれらが育んできた人。そうした地域の多様な資源が雑司が谷の中で〈見える化〉されています。ご登壇者の方々のお話から、雑司が谷という地域が、外から来た大人たちも含めて、地域の人たちをつなぐ場になっていることがわかりました。大人と大人、大人と子ども、子どもと子ども……。そして雑司が谷を起点にしながら、さらに広い地域にまで視野を広げたときに、雑司が谷が人と人をつなぐ、また自然や文化、歴史といった地域の様々な資源などを〈つなぐ装置〉として、どのような可能性があるのかを考えることは、ESD による持続可能な地域づくりと、そのための人づくりを実践していく上で、大きなヒントとなるでしょう。

当日ご登壇くださった皆様、運営に関わってくださった皆様、そして会場にお集まりくださった皆様に篤くお礼を申し上げますとともに、今後ともご指導を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

2017 年 3 月

研究代表者　阿部 治